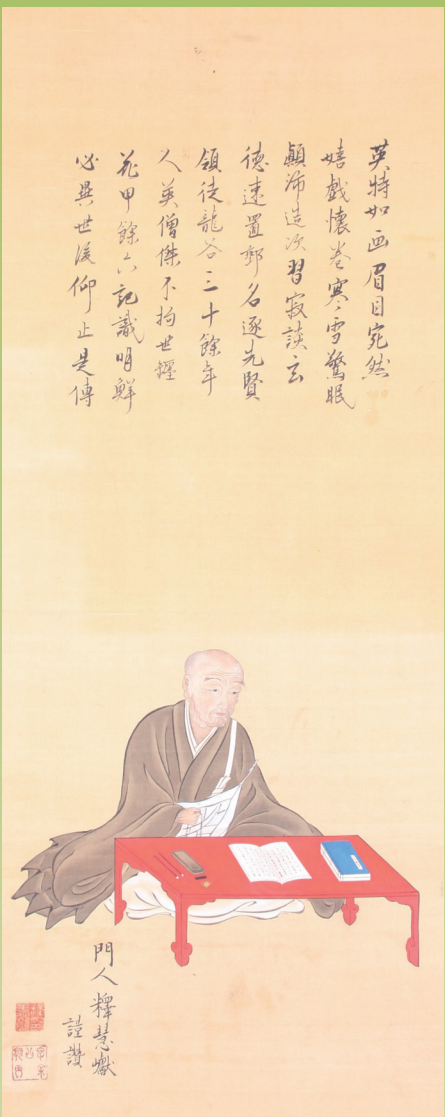




同朋大学仏教文化研究所二〇一四年度前期展示

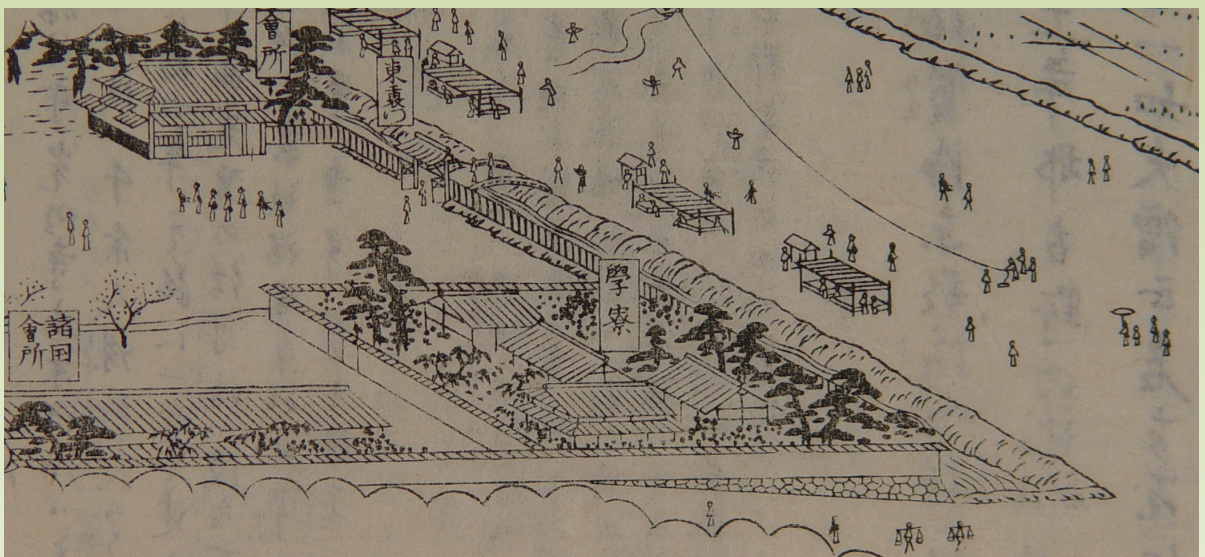
江戸期宗学から尾張教学へ

—真宗僧侶の学問世界—



莫特如画眉日宛然
嬉戲懷卷寒雪驚眼
顛沛造次習寂談云
德速置郵名逐元賢
領徒龍谷二十餘年
人英僧傑不拘世經
花甲餘心託識明鮮
心異世候仰止是傳

門人擇慧獻註



はじめに

二〇一四年度前期企画展として「江戸期宗学から尾張教学へ―真宗僧侶の学問世界―」展を開催いたします。

本学は大正十年（一九二二）六月十三日、専門学校令第四条により、文部大臣から「私立真宗専門学校」の設置開校を認可されたことから、「同朋大学学則」第十一条では、創立記念日六月十三日を休業日として規定しています。同じく宗祖正忌（親鸞聖人命日、報恩講）十一月二十八日を休業日とする根拠は、学校法人同朋学園が「教育基本法及び学校教育法」に従い、親鸞聖人の同朋和敬の精神による学校教育を行う事を目的とする真宗大谷派関係学校であるからです。

さらに真宗専門学校の創立よりさかのぼること九十五年前、文政九年（一八二六）に東本願寺名古屋懸所・名古屋東御坊（現・真宗大谷派名古屋別院）境内の南東隅に「閼蔵長屋」と呼ばれる機構の設置が本山東本願寺より許可されたことに淵源をもとめることができます。この長屋は当初、本山の方針により、学寮とは認められませんでした。幕末になってようやく学寮と認められ、名実ともに尾張教学の中心的地位を占めるようになりました。

一「江戸期宗学」学寮・相伝・異安心」、二「名古屋東御坊境内の閼蔵長屋」同朋大学の原点」、三「尾張教学の先学たち」の三部構成からなる本企画展は、尾張教学の拠点として歩んできた本学の歴史をたどることともなります。

最後となりましたが、貴重な史料の出陳をご快諾いただきました所蔵者の皆様に篤く御礼申し上げます。

同朋大学仏教文化研究所長

小島恵昭

はじめに

東西両本願寺教団では、江戸期に入り、教団の組織整備と連動しながら、京都の学寮や本山を中心に宗学を段階的に形成していった。それが数多くの僧俗によって、諸地域へ展開されていく。東本願寺教団の場合、宗学を担う僧侶には尾張国の僧侶も数多く含まれており、のちに「尾張教学」と称されるに至った。尾張へ伝達されていった歴史をたどっていくと、そこには、学問を研鑽し、教化に邁進した先学たちの姿があった。京都から尾張へ、近世から近代へ、真宗僧侶が継承していった学問世界をたどっていききたい。

一 江戸期宗学―学寮・相伝・異安心―

東本願寺教団は、寛文五年（二六六五）に学寮を創建したと伝える。学寮は、当初御堂衆の学問所であったものの、次第に末寺僧侶の教育を一元的に行う機関へ位置づけられていった。その学統は、学事の最上位の職である「講師」をはじめとする講師によって継承されていった。代表的な講師として、理綱院慧琳（一七一五〜八九）、香月院深励（一七四九〜一八一七）、香樹院徳龍（一七七二〜一八五八）がいる。

一方で、親鸞の名著である『教行信証』の伝授を根幹に、教えを儀式と一体で相伝する教学が、門主と相伝家であり、最上位の資格である「五箇寺」に継承された。限定した寺院内で師資相承されることから、学寮側からは批判的にとらえられた。

学寮教学と相伝教学の両者を学んだ僧侶に出羽国の公巖（一七五七〜一八二二）がいた。公巖は学寮で勉学に励むものの、異安心の裁定を受けた人物である。これまで隔絶してとらえられてきた学寮・相伝・異安心が絡み合う江戸期宗学の世界に史料から迫っていく。

1 高倉学寮諸制条 一冊 袋綴 大谷大学図書館蔵

縦二四・二cm×横一六・三cm

「高倉学寮諸制条」や「諸願書」、「皆遵院講師手帳控之写」など、学寮に関わる諸記録をまとめたもの。学寮が高倉通りに移された年である宝暦五年（一七五五）四月付の「寛文年中御壁書之写」にはじまる。

なお尾張先学の記事として、安政五年（一八五八）十二月付の易往院撫謙（一八〇六〜六五）「35」らの「擬講推挙願書」写と、安政六年（一八五九）七月十二日付で正定院制心（一七九八〜一八六六）「33」らが嗣講に命じられた旨の写しもある。

2 入寮制条・入寮者名簿 一冊 列帖装

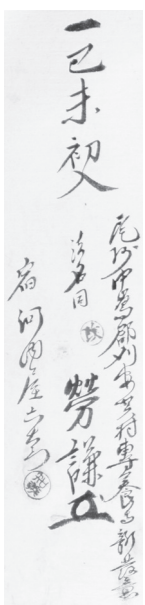
大谷大学博物館蔵 縦三〇・〇cm×横二一・〇cm

宝暦五年（一七五五）と明和七年（一七七〇）の四月に定められた学寮の「入寮制条」の写しを記した後、入寮者名簿が続く。所属寺の住所・寺院名、入寮者の法名・花押、宿名、入寮年が列記されている。尾張出身者として、養念寺（名古屋市中区）弟子の暁山や専養寺（一宮市）二男の好謙の名前がみられる。

3 入寮者帳証印 一冊 列帖装

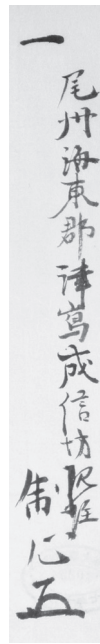
大谷大学博物館蔵 縦三〇・〇cm×横二一・五cm

安政二年（一八五五）〜明治五年（一八七二）に高倉学寮へ入寮している者の名簿。所属寺の住所・寺院名、入寮者の法名・花押、宿名、入寮年が列記されている。宿主の捺印がなされている箇所も多い。尾張出身者として、徳法寺（一宮市）弟子の龍章、専養寺の芳謙「36」などの名前がみられる。



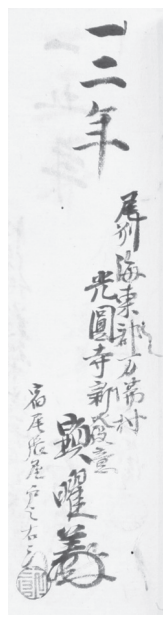
4 天保七年被仰度 御書立御請印帳 一冊 袋綴

大谷大学博物館蔵 縦二七・〇cm×横一九・五cm
公儀からの命により、本山から規律を守るよう言い渡されたことを受けて、天保七年（一八三六）四月、講者方から提出された、学寮へ入寮した者が規律を守るとの請書の「新寮控」。冒頭に規律が書かれ、請書写の後、寮司を含むと考えられる一〇三名が連名している。尾張出身者として、専養寺入寺前の擲謙「35」、成信坊（津島市）現住の制心「33」などの名がみられる。



5 入寮擬寮司録名簿 一冊 袋綴

大谷大学博物館蔵 縦二六・六cm 横一八・八cm
安政二年（一八五五）〜慶応元年（一八六五）に入寮した擬寮司の名簿。擬寮司は、寛政三年（一七九二）に新設された所化を統括する教授者の末端職。光圓寺（名古屋市中川区）新発意である頭曜「43」の名がある。

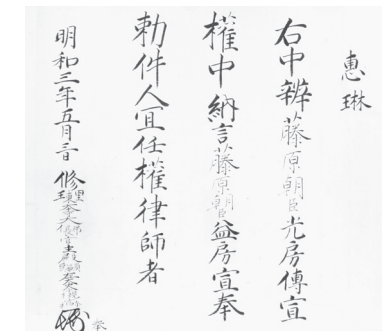
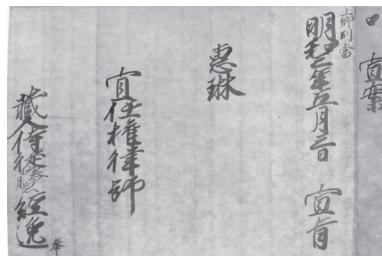


6 理綱院慧琳肖像画 一幅 軸装（絹本着色）

西弘寺蔵 縦九〇・五cm×横三六・五cm
理綱院慧琳（二七一五〜八九）は、伊勢国願了寺（三重県津市）で生まれ、のち同国西弘寺（三重県松阪市）慈空の養子となった。二代講師の香厳院惠然（一六九三〜一七六四）の門下で学問を研鑽し、明和二年（一七六五）に三代講師となる。本肖像画には「門人釋慧讞」によって記された讚がある。【写真 表紙・上段左】

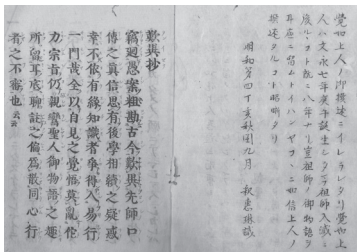
7 理綱院慧琳権律師補任口宣案・後櫻町天皇奉書

一巻 卷子（薄墨紙、一紙） 西弘寺蔵
「口宣案」縦三三・〇cm×横四九・八cm
「奉書」縦三七・〇cm×横五〇・九cm
理綱院慧琳が、講師に就任した翌年である明和三年（一七六六）五月三日付で、後櫻町天皇（一七四〇〜一八二三）から僧官である権律師を補任された際の口宣案と奉書。



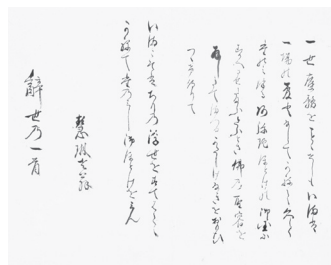
8 理綱院慧琳手沢本 十冊 袋綴（刊本）

和田恭幸氏蔵 縦二六・〇cm×横一八・五cm
理綱院慧琳が学問に用いた真宗書の刊本十冊。元禄二年（一六八九）十一月刊の『親鸞聖人御消息集四』や元禄四年（一六八九）仲春刊の『歎異抄八』が、刊行年の分かるものの中では古い。すべて一冊ずつの端本。各書の冒頭に、明和四年（一七六七）閏九月付の慧琳識語が記され、本文には朱筆で書き込みがなされており、学問に活用した痕跡が認められる。



9 理綱院慧琳辞世句墨書 一幅 軸装（紙本墨書）

西弘寺蔵 縦三〇・八cm×横三八・四cm
理綱院慧琳の辞世の句「いまこそはちりの浮世をすてはて、かねてたのミし御ほとけをミン」を記した墨書。生涯をかけて仏教を学んだ末、まもなく濁世をはなれて阿弥陀如来の国である浄土へ趣くことに迷いのない心情が読み取れる。慧琳は、寛政元年（一七八九）に七十五歳で没した。



10 龜洲講師法嘆記 一冊 袋綴（写本）

同朋大学仏教文化研究所蔵（應通文庫） 縦二四・〇cm×横一六・八cm
五代講師香月院深励（一七四九〜一八一七）の講録。「龜洲」は深励の号である。文化五年（一八〇八）六月二十七日に深励が学寮でおこなった法談の記録である「報恩講法談龜洲講師」など、四座の講録が含まれている。三河国の應通寺（豊橋市）に伝来した。

11 香樹院演説 一冊 袋綴（写本）

同朋大学仏教文化研究所蔵（應通文庫） 縦二三・八cm×横一六・八cm
深励の弟子である香樹院徳龍（一七七一〜一八五八）と易行院法海（一七六八〜一八三四）の演説を所収した講録。両者とも最終的に学寮の「講師」職に就いている。まず文政十三年（一八三〇）正月六日に、徳龍（嗣講）が物会所で話した演説録が掲載され、次に法海（講師）が同年四月、同じく物会所にて、在京諸国詰所同行へ対して行った演説録へと続く。

12 相伝叢書 十一巻 卷子 (紙本墨書)

本宗寺蔵 縦二八・一 cm

門主と相伝家の「五箇寺」に継承された相伝教学において伝授された相伝十一巻。

本宗寺(三重県松阪市)は、退転していた三河国土呂本宗寺の寺跡を引き継ぎ、宝暦六年(一七五六)三月六日、真楽寺から改号し「五箇寺」の寺格となった。

13 光尊院真詮似影 一幅 木箱入軸装(絹本着色)

本宗寺蔵 九八・六 cm×横四二・〇 cm

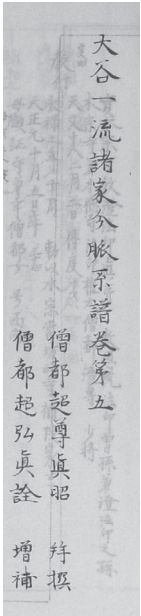
本宗寺九代住職である光尊院真詮(一七二五〜一八〇二)の似影。真詮は、宝暦四年(一七五四)十一月二十七日、転住するようにとの命をうけ、翌月二日に超弘の名を賜り、同月九日に当寺へ入寺した。

似影とは、一定の様式に従って描かれ、本山が免許した末寺住職の肖像画。本似影は、鈍色、紫紋白五条袷袢、紫無紋指貫を着用した姿。【写真 表紙・上段右】

14 大谷一流諸家分脈系譜略 一点 袋綴(写本)

本證寺蔵 縦二六・八 cm×横一九・二 cm

大谷本願寺の流れを汲む諸寺院について、本願寺歴代別に関係寺院の系譜をまとめた書物。宝暦年中(一七五一〜六四)に東本願寺一八世従如(一七二〇〜六七五)が泉南真宗寺(大阪府堺市堺区)の真昭(一七三三〜八三)に命じて編纂させた「大谷一流諸家分脈系譜」をもとに、天明五年(一七八五)に本宗寺の真詮(超弘)がまとめたもの。真詮については、「真楽寺譜」の項に加え、「本宗寺譜」の項に「中興」として、その事跡が掲載されている。



15 羽州異安心御教誡 第八 一冊 袋綴(写本)

同朋大学仏教文化研究所蔵 縦二四・二 cm×横一六・五 cm

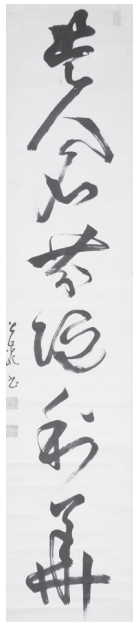
出羽国酒田(山形県酒田市)にある浄福寺の住職である公巖(一七五七〜一八二二)が、享和二年(一八〇二)に異義を唱えた疑いにより安心調理を受けた事件の取り調べ過程を記した写本。取り調べの最終過程である「御教誡」の最終日である十二月十七日に行われた第八席部分のみの写し。

16 公巖一行書 一幅 軸装(紙本墨書)

蓮開寺蔵 縦一三二・八 cm×横二八・六 cm

公巖の一行書。『正信偈』の一節である「是人名分陀利華」と墨書されている。

寛政元年(一七八九)六月、公巖は学寮講師の慧琳「6」に面会しようとして伊勢国へ赴いたが、同師はその先月に没していた。公巖は落胆したものの、以前より懇意にしていた、五箇寺本宗寺隠居の真詮「13」に面会し、相伝教学に関する諸本を書写する機会を得た。



二 名古屋東御坊境内の関蔵長屋―同朋大学の原点―

京都の学寮を中心に、僧侶の学問・教育機構が形成されていくなか、尾張国にも名古屋東御坊境内に、恒常的な講場を設けたいとの機運が高まっていった。

元禄期(一六八八〜一七〇四)に創立された名古屋東御坊は、文化・文政期(一八〇四〜一八三〇)に改築された。その完成と同時期、同朋大学の原点ともなる「関蔵長屋」が開設された。新出史料から、その歴史を改めてひもとく。

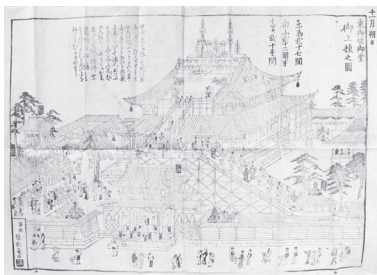
17 名古屋東御坊御堂上棟之図 一点

一紙(刷物) 深津一雄氏蔵 縦三三・九 cm×横四六・五 cm

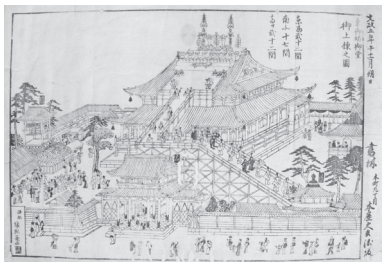
尾張藩士である猿猴菴(高力種信、一七五六〜一八三二)が描いた名古屋東御坊における上棟式の絵図。ただし、棟上げが延期になったため、病人・老人など上棟式に立ち会えない可能性のある人びとへ向けて図画して配布することを目的に作成された。実際に上棟式が執行された文政五年(一八二二)以前に販売されたと考えられる。「是を見て各こんしの志ヲ起、御取持あらハ早そく御出来有へし」とあり、上棟が成就した際に懇志を上納できるよう準備を促している。

興津宿(静岡市清水区)で代々金融業を営んでいた、専念寺(静岡市清水区、真宗大谷派)の門徒である深津家に伝来した絵図。「尾州御坊御再建御棟上図」と記した包紙に包まれており、深津氏が名古屋東御坊へ参詣した際に購入し、土産として持ち帰ったと考えられる。

17



18



18 名古屋東御坊御堂御上棟之図 一点

一紙(刷物) 蓮成寺蔵

縦三三・六cm×横四八・〇cm

文政五年(一八二二)十一月朔日に執行された、名古屋東御坊における上棟式の絵図。尾張藩士である猿猴菴が描いた図であり、本屋九兵衛が板元である。上棟式当日に販売されていた可能性が高い。図様は17と同様であり、事前に配布されていた図版が転用されている。猿猴菴著の『絵本富加美草』には、「御上棟之図并御行列之図」と書かれた、まさに本絵図などを販売している場面が掲載されている。

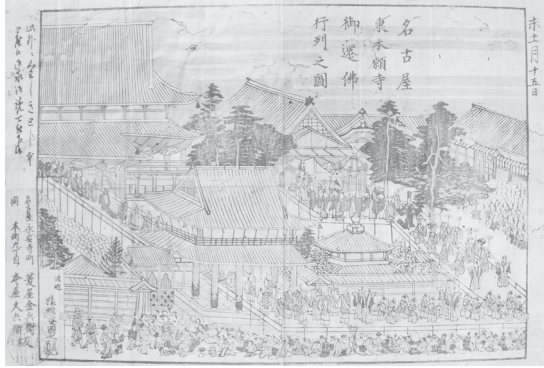
19 名古屋東本願寺御邊仏行列之図 一点

一紙(刷物・著色) 蓮成寺蔵

縦三三・五cm×横四九・〇cm

文政六年(一八二三)十一月十五日に執行された、名古屋東御坊の遷仏式における行列図。尾張藩士である猿猴菴が描いた図であり、名古屋の菱屋金兵衛・本屋久兵衛が板元である。

「此外二くわしきとじ本御座候、御求御覽可被下候」とあることから、本図とは別に、綴じ本が販売されており、その広告としての意味あいもあつたと考えられる。



20 関蔵長屋規則につき伺書 一点 継紙

名古屋別院蔵 縦一五・五cm×横六四・七cm

文政六年(一八二三)六月、名古屋城下にある三等法中(院家・内陣・余間)十五ヶ寺の惣代である養念寺(名古屋市中区)・守綱寺(名古屋市中区)から、名古屋東御坊輪番の「蓮界坊」に宛てた伺書。名古屋東御坊境内に関蔵長屋を開場することにつき、尾張国八郡法中から、長屋内を京都の学寮と同様の規則にしたいと料簡書が差し出された。しかし城下三等法中十五ヶ寺は、京都学寮同様の規則を立てることに反対する。

21 関蔵長屋学問取締り役につき口上覚 一点 継紙

名古屋別院蔵 縦一五・五cm×横九一・七cm

文政六年六月、尾張国の八郡在方法中から名古屋東御坊輪番所へ提出された口上覚。寺役・法要を調整しつつ、尾張国に修学が行き届くようにしたい。同国全体に関わることであるため「懸所関蔵長屋」は同国八郡法中が評議の上、開設したいという。ただし修学については、本山学寮の規則もあるため、寮司・擬寮司を定めて行う。以上を学問取締り役の者へ命じれば、学問は行き届くと思う。講者の人選についても、担当者が評議の上で行いたいと要望している。

22 関蔵長屋開場につき会頭差置願書 一点 継紙

名古屋別院蔵 縦一五・五cm×横七七・二cm

文政六年六月、名古屋城下にある三等法中十五ヶ寺の惣代である養念寺・守綱寺から、名古屋東御坊輪番の「蓮界坊」に宛てた願書。修学精勤のために関蔵長屋を開設するよう、尾張藩からも達しがあつた。関蔵長屋は尾張国八郡法中の評決の上、開設したい。日時も差し迫っているため「会頭」なる役職を差し置きたいという。それは講場を設けたいという要望に基づく。

23 関蔵長屋会頭人選につき伺書 一点 継紙

名古屋別院蔵 縦二四・五cm×横四六・三cm

年末詳五月、名古屋東御坊の輪番「蓮開坊」に宛てた伺書。名古屋城下にある三等法中(院家・内陣・余間)が学問修行について意見を申し出たように、懸所内には学問所や講場のための関蔵長屋を取り建てる計画である。そのため会頭を早選人選したことを届け出ている。

24 関蔵長屋講場につき伺書写 一点 継紙

名古屋別院蔵 縦一五・四cm×横七八・三cm

年末詳五月、美濃屋勘七と菱屋喜兵衛から提出された伺書の写し。東本願寺宗の寺院僧侶が学問を精勤するため、春秋二度、講者を本山から差し向けることになった。しかし二度の講釈だけでは不十分であるので、懸所内の関蔵長屋を講場としたいとの要望。また法中が熟学することは、門徒のためであるとしている。尾張国の僧侶が学問に精進するため、関蔵長屋を活用することが、門徒からも期待されている。

25 関蔵長屋規則・呼称につき伺書 一点 継紙

名古屋別院蔵 縦一五・七cm×横六六・三cm

年末詳八月、名古屋東御坊輪番の蓮界坊へ提出された伺書。名古屋東御坊の関蔵長屋で修学することについて、尾張国八郡法中は、本山学寮の規則に準拠したものにしたとの考えを届け出た。一方、名古屋城下の三等法中十五ヶ寺は、本山学寮同様の規則を立てては差し支えがあり、出席し難くなると届け出た。本山学寮の規則の内容や、学寮同様の規則を立てては差し支える理由が問われている。や、関蔵長屋は元來修学のための施設であるのだから「学寮」と称するのが当然であると主張している。長屋取り建てに際する『留記』なども参考にして再考するよう求めている。

26 僧俗學取締につき申達書 一点 仮綴
名古屋別院蔵 縦二・七cm×横一・六cm

香雲院澄玄（？～一八五二）が講釈・教諭のため派遣されることをきっかけに出された、今後の僧俗の習学に関する取締についての問い合わせへの返答。府内（城下）の三等法中で決めた上で、名古屋東御坊境内の閑蔵長屋へ会頭を差し置いて会談・講釈したい。会頭には宗学に限らず、幅広い分野について講談させる。府内の僧侶のみならず、希望者は出席できる。

27 尾張名所図会 前編 七冊 帙入冊子（刊本）

同朋学園大学附属図書館蔵
縦二・八cm×横二・八cm

『尾張名所図会』の前編は、天保十二年（一八四一）十一月に脱稿し、同十五年（一八四四）に刊行された尾張国の地誌。岡田文園・野口梅居が著し、小田切春江（一八一〇～八八）が図画を担当した。いずれも尾張藩士である。のちに、後編（六冊）・附録（五冊）も刊行される。

卷二の「東本願寺懸所其二」の挿絵に、南東角にあった閑蔵長屋が「学寮」として描かれている。

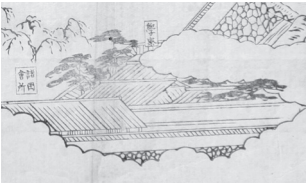
【写真 表紙・下段】

28 東本願寺掛所図会 一点 一紙（刷物）

蓮成寺蔵 縦二・七cm×横一・九cm

名古屋東本願寺掛所（御坊）を描いた刷物。書林の菱屋久兵衛・同小八郎が板元で、箔師竹三郎が弘所である。

年末詳であるが、南東角に「学寮」が描かれており、実質的に「学寮」と呼ばれ機能していた閑蔵長屋が設置された後と考えられる。



三 尾張教学の先学たち

近世から近代にかけて、尾張国の僧侶には、京都の学寮や大谷大学などで学び、教鞭をとった学僧も多かった。彼らは京都で身に付けた学問を、尾張の地でも講述し広めた。

尾張教学の先学たちについては、一定の様式に従って描かれ、本山が免許した末寺住職の肖像画である（「影」や町絵師によって描かれた肖像画、あるいは写真から、その容貌を知ることができる。また墨書や講録などから、その教学をうかがえる。

29 威広院靈曜似影 一幅 軸装（絹本着色）

養念寺蔵 縦九・七cm×横四・一cm

威広院靈曜（一七六〇～一八二二）は、越前国菟浦の太行寺や大坂の定専坊を経て、養念寺（名古屋市區）へ入寺した。香月院深励（一七四九～一八一七）の門下で研学し、京都の学寮でもたび重ねて講述した。

本似影は、小紋高麗縁の畳に左向きで着座し、白の鈍色、紫無紋の指貫、親玉の金具が金環である半装束念珠を身に付けた、本山免許による似影の典型的な特徴をそなえている。ただし「隅切り角に三つ木瓜」の寺紋と変わり六つ藤による二種紋の金白入り交じり紋である点は、独特である。【写真 裏表紙・上段右端】

30 威広院靈曜一行書 一幅 軸装（紙本墨書）

蓮開寺蔵 縦三・三cm×横二・八cm

威広院靈曜が、『唐詩選』に掲載されている張説（六七〇～七三〇）の七言律詩「香臺豈是世中情」と認められた墨書。香台豈是れ世中の情ならんや。世俗に流されない「香台」（仏教・寺院）の世界を詠んだ一節。「鐘山書」とある下に「靈曜」「鐘山」の朱印が捺印されている。「鐘山」は靈曜の号である。

31 威広院靈曜二行書 一幅 軸装（紙本墨書）

蓮開寺蔵 縦一〇・四cm×横二・八cm

威広院靈曜による、本願寺八世蓮如（一四一五～九）の言行録を主に掲載した『蓮如上人御一代記聞書』の一〇四条の一節「佛法のうへには明日の事を今日するやうにいそきたる事賞翫なり」の墨書。靈曜の仏法・学問に対する姿勢が伺える。

なお靈曜は、文化二年（一八〇五）五月、擬講となつたものの、同七年（一八一〇）十二月、尾州五人男の異安心事件により、擬講退役に処せられた。だが、没後の安政四年（一八五七）八月に、講師が追贈されている。

32 御法話 一冊 袋綴（野紙・写本）

同朋大学仏教文研究所蔵（應通文庫）
縦二・九cm×横一・七cm

威広院靈曜の法話二座、香月院深励の法話三座を収録した講録。「名古屋養念寺法話」は、文政三年（一八二〇）十二月八日の二座、「香月院講師法話」は文化九年（一八一二）八月二十七～二十八日の講述などである。三河国の應通寺（豊橋市）において書写され伝来した。「ミカワヨシタ應通寺」の朱印が捺印されている。野線の用紙に書写されていることから、近世の講録が近代になって書写されたと考えられる。

33 最要鈔南要註 一冊 袋綴（写本）

成信坊蔵
縦二・七cm×横一・九cm

正定院制心（一七九八～一八六六）は寛政十年（一七九八）、勝幡西蓮寺（愛西市）の長男として誕生し、のちに津島成信坊（津島市）に入寺した。学寮では雲華院大含（一七七三～一八五〇）に師事し、嘉永二年（一八四九）には擬講、安政六年（一八五九）には嗣講に昇進している。

本書は、制心が擬譜昇進の二年後にあたる嘉永四年（一八五二）十月十二日（同年十一月十二日に五十四歳で著した、本願寺三世覚如（一二七〇～一三五二）著『最要鈔』の注釈書である。六門（一体裁を定、二弁と由、三造由を明かす、四大綱を示す、五題目を解く、六本文を釈す）から構成されており、「信心」「聞」「往生」といった術語から一宗の最要を説き明かしている。「尾州可弁制心蔵書」と刻した蔵書印が捺印されている。なお「可弁」は制心の号である。

34 歸命字訓釋要註第一 一冊 袋綴（写本）

成信坊蔵 縦二八・〇cm×横二〇・〇cm

正定院制心が、「南無阿弥陀仏」の六字について著した書物。『教行信証』行巻の展開を見据えながら、七高僧の第五祖である善導（六一三～八一）の六字釈、宗祖親鸞（一一七三～一二六二）の名号釈、本願寺八世蓮如（一四一五～九九）の『御文』の六字に対する了解を尋ねている。また証空（西山派）、聖光（鎮西派）の理解や、さらには香月院深助など江戸期宗学の見解も取り上げている。六字釈に対する江戸期の学問体系を色濃く反映した一書と言える。

35-1 易往院攝謙似影 一幅

木箱入軸装（絹本着色） 専養寺蔵

縦九・四cm×横四二・四cm

易往院攝謙（一八〇六～六五）は、小塚村（名古屋市中川区）の浅井家に生まれたが、二十歳で上京し、香樹院徳龍（一七七二～一八五八）について学んだ。天保十一年（一八四〇）に三十五歳で専養寺へ入寺し、没後の明治二十九年（一八九六）六月二十日、嗣講が追贈された。なお4『天保七年被仰度 御書立御請印帳』には、「小塚村西生寺弟」として、攝謙の名が記されている。

本似影は、小紋高麗縁の畳に左向きで着座し、白の鈍色、寺紋入五条袈裟、紫無紋の指貫、親玉の金具が金環である半装束念珠を身に付けた、本山免許である似影の典型的な特徴を持つ。なお「丸に日の丸三つ扇」の寺紋は、現在専養寺にて用いられていないが、当時の寺紋であろう。【写真 裏表紙・上段右より二番目】

35-2 披露状 一点 一紙

専養寺蔵 縦一九・四cm×横一七・六cm

攝謙似影を願い出る際、金二十五銭と十五円二十銭を納めたことに対し、明治二十年（一八八七）十二月二十三日付で東本願寺会計部から発行された披露状。

35-3 似影願 一点 野紙

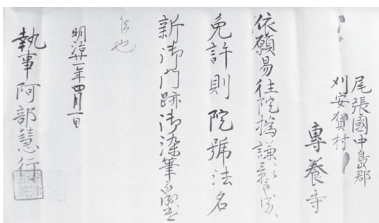
専養寺蔵 縦二八・三cm×横四〇・三cm

攝謙似影の願書。明治二十二年（一八八八）一月六日、専養寺住職の禿芳謙「36」は、所属する尾張国第六組の組長である法運寺住職の高野義正による署名・捺印も添えて、東本願寺執事の阿部恵行（一八二〇～八八）に宛てて似影を願い上げ、同月十日に許可された。

35-4 免許状 一点 包紙入一紙

専養寺蔵 縦二〇・〇cm×横三四・五cm

明治二十一年四月一日付で東本願寺執事の阿部恵行が発行した攝謙似影の免許状。院号法名は新門跡である大谷光瑩（現如、一八五二～一九二二）が染筆したという。似影と共に木箱に納められていた以上三通の文書から、似影を願い出る際の手続き過程が判明する。



36-1 半雲院勞謙似影 一幅

木箱入軸装（絹本着色） 専養寺蔵

縦九・七cm×横四一・〇cm

半雲院勞謙（一八四七～九六）は、易往院攝謙「35」の子息。没後の明治三十八年（一九〇五）、擬講が追贈された。3『入寮著帳証印』にその名が記されている。

本似影は、35-1「易往院攝謙似影」同様、本山免許である似影の典型的な特徴をそなえている。【写真 裏表紙・上段左より二番目】

36-2 似影願 一点 野紙

専養寺蔵 縦二七・八cm×横三九・九cm

勞謙似影の願書。明治三十一年（一八九八）十月十一日、専養寺住職の禿謙意は、所属する尾張国第六組の組長である敬應寺住職の普光碩聞による署名・捺印も添えて、東本願寺総務の大谷勝縁（一八五六～一九二四）に宛てて似影を願い上げ、翌三十二年四月十七日に許可された。

36-3 免許状 一点 包紙入一紙

専養寺蔵 縦二〇・〇cm×横三四・八cm

明治三十二年九月付で東本願寺総務の大谷勝縁が発行した勞謙似影の免許状。院号法名は東本願寺二十二世現如（一八五二～一九二三）が染筆したという。

36-4 写真 一点 包紙入一紙

専養寺蔵 縦一〇・六cm×横六・五cm

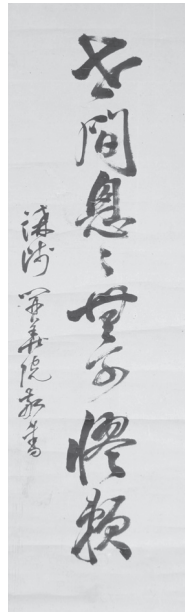
前掲三通と共に似影木箱に納められていた写真。勞謙の写真と考えられる。36-2見本として、「似影願」と共に本山へ提出された可能性も高い。



37 開華院法住一行書 一幅 軸装(紙本墨書)

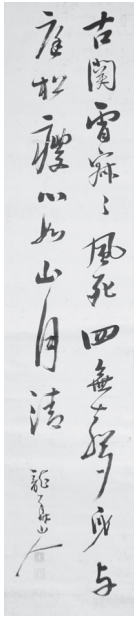
蓮開寺藏 縦九六・六cm×横三〇・〇cm
開華院法住(一八〇六〜七四)は、佐渡国蓮生寺二男として生まれ、安政五年(一八五八)に守綱寺(名古屋市中区)に転住した。妙音院了祥(一七八八〜一八四二)や開悟院靈暉(一七七五〜一八五二)などのもとで学問に励み、明治四年(一八七二)講師に昇進した。

「世間恩無可慘類」(『大無量寿経』下巻)と書した墨書。世間恩々として慘類すべきことなし。世間は慌ただしく頼るべきものもないと、世間の無常をあらわす一節。



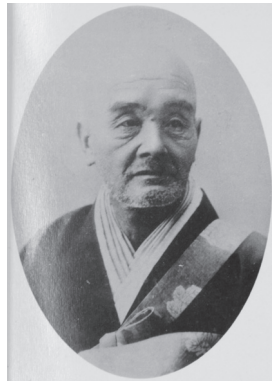
38 六々庵空音一行書 一幅 軸装(紙本墨書)

蓮開寺藏 縦一三五・一cm×横二九・三cm
六々庵空音(一八二四〜一九〇三)は、養源寺(津島市)で生まれ、常徳寺(愛西市)へ入寺した。姓は龍華。明治三十四年(一九〇一)に擬講となった。「古閑宵寂々風死四無声身与庭松瘦心如山月清」と書した墨書。「龍華山人」と署した下に「龍華山主」「空音」の朱印が捺印されている。



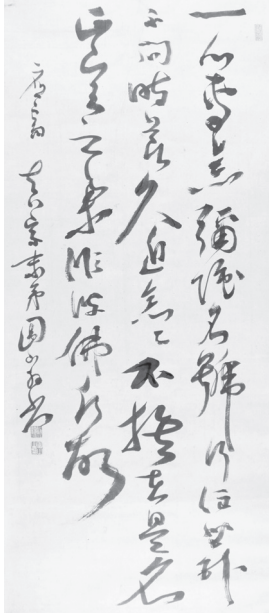
39 田山院静観写真(信力寺人佛記念写真集)

信力寺藏 一冊 冊子
縦二六・八cm×横一八・七cm
田山院静観(一八三三〜一九〇二)は、信力寺(愛西市)に長男として生まれた。姓は海老原。正定院制心や香樹院徳龍について学問研鑽した。明治三十一年(一八九八)、嗣講となった。昭和四十六年(一九七二)十月三日に厳修された信力寺の入佛式法要を記念して作成された写真集に掲載されている静観の写真。



40 田山院静観墨書 一点 一紙(マクリ)

信力寺藏 縦二二八・五cm×横五五・四cm
田山院静観による、七祖第五善導(六一三〜八一)著『観無量寿経疏』の散善義にある「一心専念弥陀名号 行住坐臥 不問時節久近 念々不捨者 是名正定之業 順彼佛願故」の墨書。「応需 真宗末弟田山拝書」の署名の下に、「静観」「田山之印」の朱印がある。



41 超証院日南歎異抄墨書 一幅 軸装(紙本墨書)

蓮開寺藏 縦一〇二・〇cm×横四一・二cm
超証院日南(一八五〇〜一九一六)は願行寺(一宮市)に生まれ、当寺の住職を継承した。姓は横超。広陵了栄(一八一七〜一九〇〇)や吉谷覚寿(一八四三〜一九一四)より宗学を学び、大正二年(一九一三)擬講に昇進した。

日南による『歎異抄』第七条の墨書。「横超老南謹書」と署名した下に、「横超」「日南」の朱印がある。

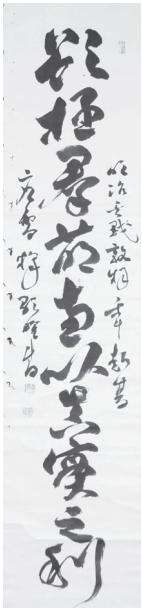
42 学師龍天碑拓本 一点 一紙

徳法寺藏 縦一三八・八cm×横六五・三cm
広度院龍天(？〜一八七九)は丹羽郡西大海道(一宮市)の出身で、のちに徳法寺(二宮市)へ入寺した。姓は尾中。易往院撓謙「35」から宗学を学び、学寮では余乘を専攻した。没後の大正十一年(一九二二)、擬講を追贈されている。死去した翌年の明治十三年(一八八〇)、境内に「学師釋龍天之碑」と刻まれた碑が建立され、現存する。本史料は碑文の拓本。

43 光明院顕曜一行書 一幅 軸装(紙本墨書)

蓮開寺藏 縦一三三・〇cm×横三一・五cm
光明院顕曜(？〜一九〇八)は光圓寺(名古屋市中川区)で生まれ、同寺の住職となる。姓は花園。開華院法住「37」から宗学を学ぶ。

明治某年に顕曜が認めた、親鸞の主著『教行信証』教巻にも引用されている「欲拯群萌患以真実之利」(『大無量寿経』)の墨書。「応需 釈顕曜書」と署名した下に「臥龍山」「顕曜」の朱印が捺印されている。

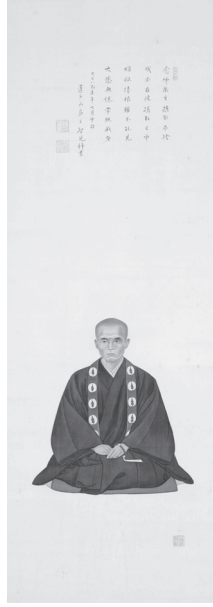


44 成徳院智見肖像画 一幅 軸装(絹本着色)

祐誓寺蔵 縦一〇一・四cm×横三五・七cm

成徳院智見(一八六八〜一九三八)は祐誓寺(名古屋市熱田区)の住職。姓は住田。明治二十年(一八八七)二月、真宗大学寮専門部別科に入学し、その後、本科、研究科と卒業する。在学中は細川千巖(一八三四〜九七)に師事し、香月院深励の学風を継承した。その後、真宗大学、真宗大谷大学の教授を歴任する。大正十年(一九二二)六月十三日に認可された、同朋大学の前身である真宗専門学校は、智見の構想によるため、同朋大学の学祖に位置づけられている。

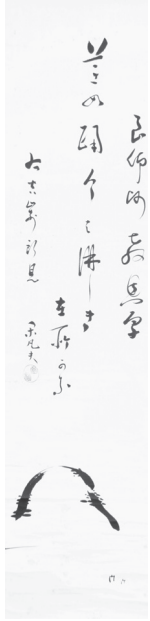
智見の肖像画。葉牡丹の学師輪袈裟に間衣を着用した姿。上部に、大正八年(一九一九)七月中旬の自筆讃が記されている。



45 成徳院智見俳句画賛 一幅 軸装(紙本墨書)

蓮開寺蔵 縦二二七・〇cm×横三三・五cm

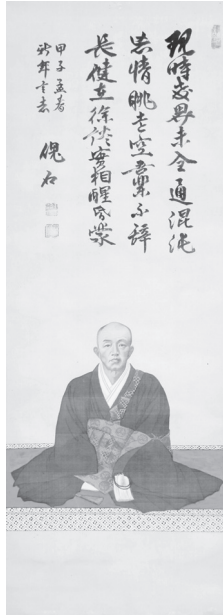
成徳院智見による俳句画賛。「良に師教の恩厚を仰ぐ」(『教行信証』化身十卷末)と記したのち、「蓮如踊今は淋しき在所かな」の俳句を記し、越前国吉崎と思われる山海を描いている。智見の号である「閑凡夫」が署された下に、「幽栖」の朱印が捺印されている。



46 心源院覚道肖像画 一幅 軸装(絹本着色)

願興寺蔵 縦一一三・五cm×横四一・九cm

心源院覚道(二八六八〜一九二六)は願興寺(名古屋市中川区)住職。姓は鬼頭。明治二十年(一八八七)に真宗大学へ入学し、細川千巖、南条神興(一八一四〜八七)のもとで就学。大正十四年(一九二五)講師に就任。尾張中学校長、真宗大学教授を歴任した。覚道の肖像画。黒衣に六藤紋の大僧都五条袈裟を着用し、木念珠を持つ姿を描いた。上部に、大正十三年(一九二四)正月に記した自筆讃あり。



47 心源院覚道三行書 一幅 軸装(紙本墨書)

蓮開寺蔵 縦二二三・〇cm×横四八・〇cm

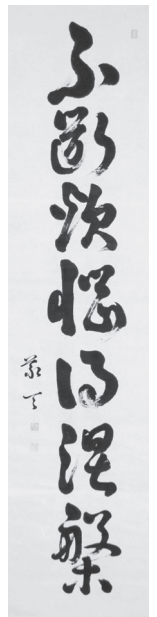
心源院覚道が大正八年(一九一九)六月に、『教行信証』行巻にも引用されている「其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転」(『大無量寿経』下巻)と記した墨書。

48 真性院義天一行書 一幅 軸装(紙本墨書)

明教寺蔵 縦二三〇・〇cm×横三〇・九cm

真性院義天(二八七一〜一九四八)は明教寺(愛西市)に生まれ、同寺の住職となる。姓は飛鳥井。高倉大学寮で学び、特に天台を専攻した。昭和三年(一九二八)嗣講となり、同六年(一九三一)四月からは真宗専門学校で教鞭をとった。

義天による『正信偈』の「不断煩惱得涅槃」墨書。

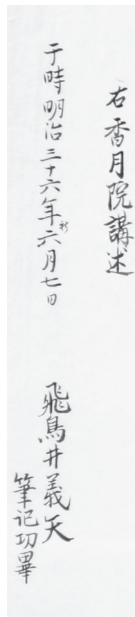


49 香月院深励講述「御文二帖目初通」講録 一冊

袋綴(写本) 明教寺蔵

縦二三・六cm×横一六・〇cm

香月院深励が年末十月十八日から十一座にわたって行った「御文二帖目初通」に関する講述の記録を、明治三十六年(一九〇三)六月七日に、「飛鳥井義天」が書写した講録。江戸期宗学の大成者である香月院深励の講録を、明治中期に尾張先学の真性院義天が継承している足跡を示す一書である。

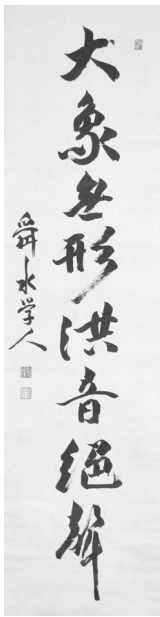


50 重願院知成一行書 一幅 軸装(紙本墨書)

蓮開寺蔵 縦二二九・六cm×横三四・三cm

重願院知成(一八七五〜一九三八)は養照寺(名古屋西区)住職。姓は「柳」。明治四十年(一九〇七)九月、尾張中学を創設し校長となる。また大正十年(一九二〇)六月十三日に認可された、同朋大学の前身である真宗専門学校を創設し、初代校長に就任。大正十五年(一九二六)六月、嗣講に昇進。

知成が「大象無形洪音絶声」と記した墨書。「舜水学人」と署名した下に、「知成」「叟水」の朱印がある。



51 顕諒院賢瑞肖像画 一幅 軸装(絹本着色)

正明寺蔵 縦九九・〇cm×横四一・八cm
 顕諒院賢瑞(一八八〇〜一九七二)は、正明寺(名古屋市中川区)に生まれ、同寺の住職となった。姓は横井。真宗大学を卒業と同寺に開教師に任命され、天津別院(中華人民共和国天津市)の輪番となる。明治四十四年(一九一一)七月、擬講となった。鈍色に、「上がり藤菱」の寺紋入五条袈裟を着用した頭端の肖像画。衣の色目と顔が正面を向いている点以外は、本山免許の似影と同様の様式である。



52 霞洞院円成講師拜命時俳句墨書 一幅

軸装(紙本墨書) 蓮開寺蔵 縦一三一・四cm×横三四・六cm
 霞洞院円成(一八〇一〜一九五〇)は寛順寺(岩倉市)に生まれ、同寺の住職となった。姓は稲葉。昭和十三年(一九三八)三月から、重願院知成に代わり、真宗専門学校(現・真宗大学)の二代校長となる。同校の大学昇格を推進し、昭和二十五年(一九五〇)四月から、新制大学として発足した同朋大学の初代学長となった。昭和十一年(一九三六)八月、円成が講師に就任した際に詠んだ俳句の墨書。「沐猴ハ冠して汗の曇る哉」と、自身を猿に譬え、講師という重責を拝命した際の戸惑いを率直にあらわしている。

53 霞洞院円成筆成徳院智賢辞世歌墨書 一幅

軸装(紙本墨書) 蓮開寺蔵 縦二二六・九cm×横三〇・一cm
 「任田講師辞世歌」を霞洞院円成が認めた墨書。①「念仏にてまゐり給ひし父母のみ跡をふみてわれは行くなり」、②「しぬれと娑婆執着の凡愚かな七十有一なから世乃中」の二句が記されている。①の上部には「同一念佛無別道故」(『浄土論註』)、②の上部には「一生雖尽希望不尽」(『往生要集』)も認められている。左脇には、「未資円成拜書」と署名している。

54 無量院秀頭肖像画 一幅 軸装(絹本着色)

明源寺蔵 縦九九・三cm×横四二・一cm
 無量院秀頭(二八八九〜一九二七)は、明源寺(稲沢市)に生まれ、同寺の住職となる。姓は河野。大正四年七月、真宗大谷大学研究科を卒業と同時に擬講。昭和四十四年(一九六九)一月に、日本画家の小早川好古(一八九〇〜?)が描いた秀頭の肖像画。鈍色、紋白の葉牡丹紋に金檜垣の擬講五条袈裟、紫地の大紋指貫を着用した姿。



55 陵仙院長全卒業論文 八冊 袋綴(写本)

光西寺蔵 縦二三・六cm×横一六・〇cm
 陵仙院長全(二八八九〜一九二七)は福井県丹生郡吉川村で生まれ、南條文雄の仲介で光西寺(知多市阿久比町)に入寺。姓は阪笠。

56 清徳院智導写真 一点 写真

願念寺蔵 縦二二・六cm×横八・八cm
 大正六年(一九一七)六月に真宗大谷大学研究科を修了した時の卒業論文。「浄土教変遷の教理的並に社会的的研究」と題し、同年本山から擬講を授与された。「浄土教」について、インド・中国・日本における仏教伝播の側面を教理的に解明した内容。例えば、小野玄妙や望月信亨の学説を挙げ、教理的に浄土教発達史の検証を試みる。さらに阿含・方等・般若・涅槃、密教といった教理を概観し、釈迦と阿弥陀の関係論証。また補篇の「華嚴宗の浄土教」では、華嚴教学の蓮華蔵世界と浄土教の極楽世界に関する興味深い説示がある。

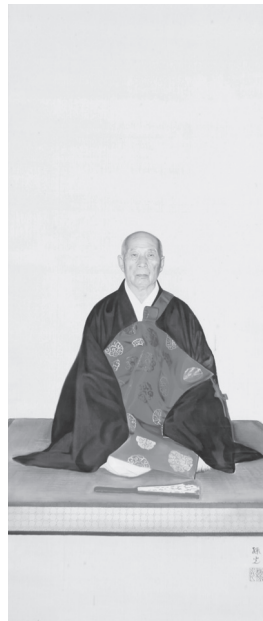


57 魚山寺開基堅子似影 一幅 軸装(絹本着色)

魚山寺蔵 縦九九・一cm×横三一・六cm
 魚山寺開基堅子(一八九三〜一九七五)は、守綱寺(名古屋市中区)に生まれ、のちに現在地に魚山寺(名古屋市中区)を開基した。姓は羽塚。宗派内における声明・雅楽の大成者。昭和四十三年(一九六八)嗣講。堅子の似影。白の鈍色、紋白の五条袈裟、紫地無紋指貫を着用する点は本山免許の通例の様式だが、顔が正面を向いている点特徴的。裏に「真宗大谷派本山」と印文のある朱印がある。【写真 裏表紙・上段左端】

58 流水院法遠肖像画 一幅 軸装(絹本着色)

安養寺蔵 縦一〇九・六cm×横四六・七cm
流水院法遠(一九〇三〜一九八三)は、安養寺(名古屋市中川区)住職。姓は飯田。昭和十九年(一九四四)五月、真宗専門学校の教授に就任し、同年七月擬講。昭和二十一〜二十八年(一九四六〜一九五三)、名古屋別院の輪番を務めた。その後も宗派の要職を歴任。緑光なる人物が描いた法遠の肖像画。紫衣に雲牡丹紋の権大僧正五条袈裟を着用した姿にて描かれている。



59 清甫院章真肖像画 一幅 軸装(絹本着色)

長円寺蔵 縦一〇八・四cm×横四一・五cm
清甫院章真(一九〇五〜一九五〇)は、長円寺(名古屋市中川区)で生まれ、同寺の住職となった。姓は龍山。昭和七年(一九三二)三月に大谷大学研究科を修了後、同年四月より大谷大学予科専門部教授となる。昭和二十五年(一九五〇)四十四歳の若さで没する。弥富市出身の日本画家である服部黙耕(一九〇〇〜七九)が描いた章真の肖像画。栗色系統の裳付、萌葱色で牡丹紋の紋白五条袈裟、紫地指貫を着用した姿。



蓮開寺蔵 縦一三三・八cm×横三二・七cm

瑜伽院章信(一九〇七〜一九七七)は、定力寺(葉栗郡木曾川町)に生まれ、同寺の住職となった。姓は富貴原。大谷大学卒業後、法隆寺勸学院の佐伯定胤の下で唯識法相宗学を研鑽する。その後、大谷大学専門部・学部教授を経て、昭和二十五年(一九五〇)から東海同朋大学助教授兼学務部長をつとめた。二年後、大谷大学短期大学部に移つてからも、同朋大学で非常勤講師をつとめ、以後、大谷大学で文学部教授や図書館長を歴任した。

章信が「處世若大夢」と書した墨書。「定力納書」と署名した下に「沙弥章信」などの朱印が捺印されている。「世に処るは大夢の若し」とは、迷える人生を長い夢に喩えた莊子(齊物論篇)を踏まえて李白が読んだ五言古詩「春日醉起言志」の初句からとつたものである。自身も酒を好み、かつ、唯識思想史研究に大きな功績を残した富貴原の、酒仙李白の無常観に対する深い共感が、うかがえる。



61 信楽院顕正肖像画 一幅 軸装(絹本着色)

阿弥陀寺蔵 縦一〇七・六cm×横四二・六cm
信楽院顕正(一九一二〜四四)は、阿弥陀寺(清須市)に生まれた。姓は浅野。昭和十四年(一九三九)、大谷大学研究科を修了し、同年七月に擬講となった。将来を嘱望されるも、昭和十九年(一九四四)九月三日、戦場にて三十三歳の若さで没した。顕正の肖像画。含菊色の裳付、萌葱色紋白で「丸に左違鷹の羽」の寺紋入五条袈裟、浅黄色大紋指貫を着用した姿。

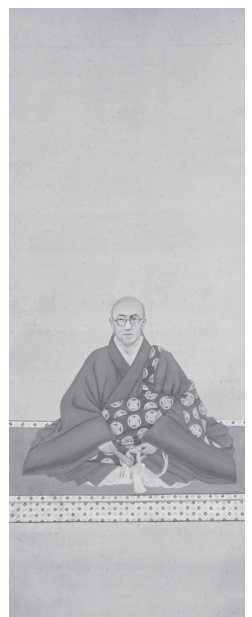
62 名古屋別院親鸞六百五十回忌御遠忌伝道本部員記念撮影写真 一点 写真

名古屋教区教化センター蔵(徳法寺旧蔵)

縦二〇・九cm×横二六・七cm

大正十一年(一九二二)四月二十一〜二十八日に執行された名古屋別院での親鸞六五〇回忌で、伝道に従事した本部員の記念撮影写真。四月二十六日に撮影された。総勢七十二名で、写真裏に名簿が記されている。

【写真 裏表紙・中段】



【凡例】

- 一、本パンフレットは同朋大学仏教文化研究所二〇一四年度前期展示にあたって作成した。
- 二、編集は同朋大学仏教文化研究所において行った。
- 三、作業担当は以下のとおりである。
 - ・担当主任……………松金直美(所員)
 - ・解説執筆分担
 - はじめに、第一章、第二章……………松金直美
 - 第三章 33〜34……………市野智行(客員研究員)
 - 第三章 55……………藤村潔(客員所員)
 - 第三章 60……………藤井由紀子(所員)
 - 第三章 その他……………松金直美
 - ・写真撮影……………松金直美、藤井由紀子
- 二、図録の史料番号は、展示と一致する。
- 三、文字については原則として通用の字体とした。
- 四、解説文においては敬称を略した。



同朋大学仏教文化研究所

二〇一四（平成二十六）年度前期展示

江戸期宗学から尾張教学へ

—真宗僧侶の学問世界—

会期 七月十日（木）～二十二日（火）

会場 D・プラザ閣蔵一階ギャラリー

編集・発行 同朋大学仏教文化研究所

〒四五三―八五四〇

名古屋市中村区稲葉地町七―一

（電話）〇五二―四一―一三三三

発行日 二〇一四年七月十日

印刷 双光エシックス株式会社